

B—40 衣蛾による毛織物の食害試験について

奈良女大家政 辻井 康子

1. 毛織物に防虫加工を施した場合，その効力の判定には羊毛害虫を使って生物試験を行なう。この場合再現性のよい試験結果を得るためには，虫の生理的条件の揃っていることが重要である。

イガは飼育法が比較的簡単で試験に用い易いが，飼育条件が異なるとその成長に大差を生じ，そのようなイガ

を用いた場合試験成績の再現性は非常に悪くなってくる。そこで今回は試験に用いる幼虫について、種々の条件を設定して食害状況を検討した。

2. 研究室で累代飼育を続けているイガを用いて、(1)温度別飼育、(2)飼料別飼育、(3)発育段階、(4)試験前に1週間試験用の毛織物で飼育するなどの条件の幼虫を用い、食害試験用羊毛標準布について食害実験を行なった。

実験条件は試験布（大きさ 2 cm 角）と、イガ幼虫10頭を、直径 4 cm、深さ 1.5 cm のガラスシャーレに入れて、温度 30°C、期間2週間として、10回のくり返しを行なった。

3. 食害試験の結果は、幼虫の発育状態によって異り 30°C でカツオブシを飼料として飼育し、ふ化後28~35日目の幼虫、及び 20°C でカツオブシ50~70日目の幼虫の食害量が大きく再現性のよい結果を得た。フランネルよりもカツオブシを飼料とした場合同令期の幼虫では体重も大きく食害量も大きい。